

# ツリガチ!

TSURI GACHI

## 内房のSLJ 文◎高橋 剛

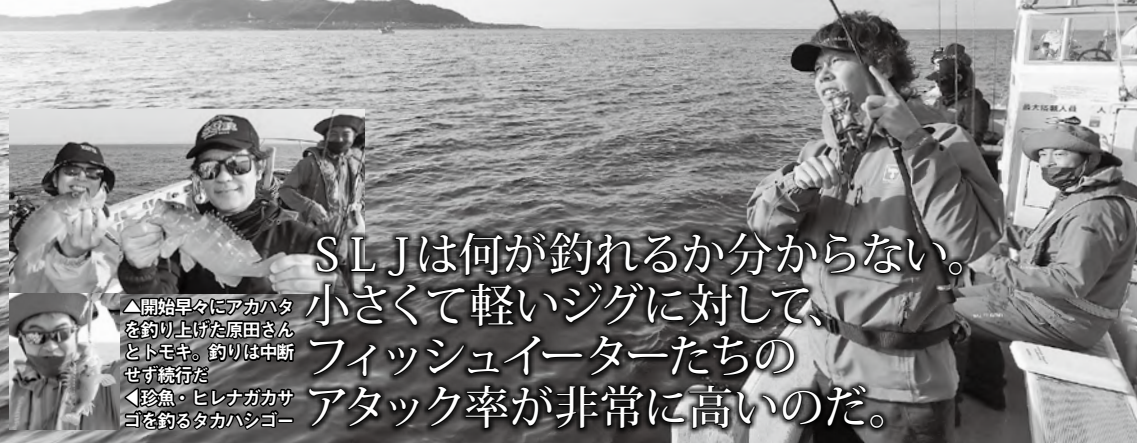


★釣りをしていると、たまにとんでもなく楽しい日が訪れる。今回の内房のスーパーライトジギングは、ガチでそんな時間だった。底抜けに明るくて楽しくて、笑いが絶えない。釣果だけでは得られない、でも釣果がないと得られない喜び。「釣りをしていたよかった」「釣りっていいな」。だれもが純粋に、心からそう思っていた。



★ウツカリカサゴはバリバリ釣れた

★水深20~30メートル前後ではスピニングタックルを使い、40グラムのジグをアンダーハンドキャストして広く探る



SLJは何が釣れるか分からない。小さくて軽いジグに対して、フィッシャーたちのアタック率が非常に高いのだ。

▲開始早々にアカハタを釣り上げた原田さんとトモギ。釣りは中断せず続行だ  
◀珍魚・ヒレナガカサゴを釣るタカハシゴ

五郎船長もサイコーである。林訥とした人柄の五郎船長は、大の釣り好きだ。隙あらば竿を握りたくてウズウズしている人だから、我われにどうにか釣らせようとしてくれるし、釣れば本気で喜んでくれる。こっそり

りと自分の釣りの参考にするという、釣りの鑑である。こんな6人がそろっている時点で、面白くないはずはない。しかも館山沖の、根魚やマダイ、青物の実績ポイントを狙うのだ。楽しみに決まっていた。

タカハシゴが「なんだこりや」と訝しがりながら釣り上げたのは、カサゴとオコゼのような魚体の見慣れない魚だ。「なんだなんだ?」「毒があるかもしれないから、触らないほうがいいよ」「触るなよ、触るなよ」「それって、振り?」と、高まった船中のテンションを一時でかさらせたのは、ピシッと合わせて大きく竿を曲げたイチロウだ。

素晴らしい一日、としか言いようがなかった。船着き場に帰ると全員が名残惜しそうで、空は澄み、風は心地よかった。「こんな日が終わらなければいいのに……」とだれかが言う。「楽しかったよな」「小学生の夏休みみたいだよ」とだれかが同意し、全員が静かにうなづく。

見ていて飽きない。トモギと板倉友基さんは、クロダイのヘチ釣りの名手だ。27歳の若き彼は、最近になって船釣りの魅力にハマったばかりだが、「えー、ボク、初めてなんです」と無邪気な笑顔で並み居るベテランたちを油断させ、そのスキにバツバツと本命を釣りまくる。



▲右舷に5人並んで入り、ドテラ流して釣っていく

そして彼はムードメーカーだ。だれかの竿が曲がれば、「きた? きちゃった!?!」と大声を上げ船全体を盛り上げる。ヨッシーの釣友であるイチロウこと鹿島一郎さんは、いつもみんなにレッドブルやチョコを振る舞うアヤシイ人だ。独自のアプローチで釣りに臨み、みんなと違うことをやって玉砕し、性懲りもなくまた奇抜な釣りで玉砕し……を延々と繰り返す。

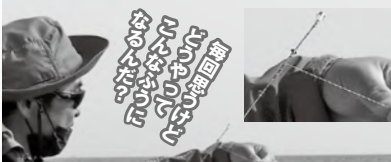
だが、4人だけではなかった。集合時間の朝5時、船着き場に甲高い笑い声が響いたのである。バイクレースファンならだれもが知るその声。1993年世界グランプリ250ccクラスチャンピオンの原田哲也さんが、ひょっこりと登場したのだ。

「ゲジゲジしたエサを使わないし(註)アオインソメのこと、ジグは軽くてラクだし、結構釣れるし、工夫もできるし、サイコーだよ」と笑う。SLJは確かにサイコーだが、勝山から釣りセンターの和田

### 世界GPチャンプの原田哲也さんが内房スーパーライトジギングに参戦。

だが、4人だけではなかった。集合時間の朝5時、船着き場に甲高い笑い声が響いたのである。バイクレースファンならだれもが知るその声。1993年世界グランプリ250ccクラスチャンピオンの原田哲也さんが、ひょっこりと登場したのだ。タカハシゴにそのかさか釣りの世界に足を踏み入れた原田さんは、今やすっかり「リアル釣り人」だ。モノコに居を構えている彼は釣り竿をつがえ、F1コースにもなる華やかな道を横断し、マリナーにズラリと停泊する巨大クルーザーを横目

### 当日の船上で見つけた 館山沖のSLJで 〇〇しがち+シーン



#### 穂先に道糸が絡まりがち

▲移動中に道糸がガイドや穂先に絡まってしまうことがある。これに気が付かずにはキャストしようものなら穂先が破損することもある。投入前に確認しておこう

#### スプールから道糸が はみ出しがち

▶テンションをかけずにリールを巻くとスプールからビヨンを巻くと道糸がはみ出してしまふ。バックラッシュの原因になるので、はみ出しまで道糸を出して巻き直そう



#### 記念写真を撮りがち

▲「記念写真を撮ろうよ」と提案するタカハシゴー。主役やゲストを差し置いて言い出しっぺがなぜかセンターに!?

#### ソフトルアーを 使いがち



▲SLJ乗合でせっかくソフトルアーを持ち込むタカハシゴー。根魚が釣れるまでやめなかった



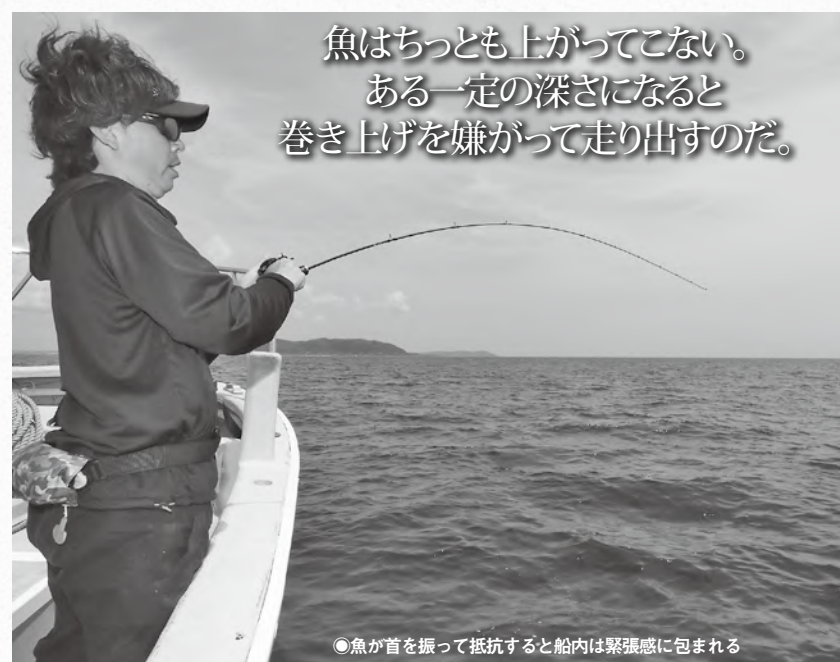
#### 反省会をしがち

▲港へ帰る船上で、大型の青物らしきをバラした件についてヨッシーを困らせて反省会が開かれた

#### フックがリーダー に絡まりがち



▲強くシャクるとジグが動き過ぎてフックがリーダーに絡まってしまうことがある。ジグの重みを感じながらゆっくりリヤクろう



魚はちっとも上がってこない。  
ある一定の深さになると  
巻き上げを嫌がって走り出すのだ。

●魚が首を振って抵抗すると船内は緊張感に包まれる



▲「せめて魚の顔だけでも見たかった」とうなだれるヨッシーに称賛の拍手が贈られる



▲引きちぎられたリーダーを見て悔しが

び、竿からテンションが抜けた。「サメだ。サメにやられちゃった」とヨッシー。ブツツリと切られたリーダーが虚しい……。この日は全員が右舷に立ったが、トモのトモキが潮先で、以降のイチロウ、チャンピオン原田、タカハシゴー、そしてミヨシのヨッシーの順に魚がヒットすることが多かった。釣り座で言えば、ヨッシーが最も不利な潮だったのだ。そこでヨッシーは80グラムと重めのジグをチョイスしていた。いち早くジグを魚の前に落とし、口を使わせる作戦を採った。それが功を奏した……。ものの、残念ながらサメに持っていかれてしまった。が、ドラマはこれで終わりではなかった。「色んな魚が釣れたし、ヨッシーがとりあえず推定青物を掛けたし、あとはマダイだな」と言いつつ臨んだ最後の流しで、チャンピオン原田の竿がゴンゴンとたたかかれたのである。青物をサメにやられて放心状態だったヨッシーの目が、瞬時に輝きを取り戻す。「哲也さん、それマダイだよマダイ。慎重に、慎重に！」とテンション爆上がりヨッシーに対して、当の本人は「なんだら

かり楽しくなっちゃってしまっている。「お、AKH釣れた」「アカハタね」「お次はUKR KSGだ」「えーと、ウツカリカサゴか」「ESOだあ」「エソね。そのままじゃん」この中にバイクレースの世界チャンピオンが交じっているかと思うと、なかなか痛快だ。うねえ？」と落ち着いている。世界の頂点に立った男は、内房の魚にも負けないのである。じっくりと巻き上げ、イチロウの差し出すネットに収まったのは、なんと本当にマダイだった。思わずガツッポーズを見せるチャンピオン原田。現役時代、レースで勝つてもそうそう見せることがなかったガツッポーズと底抜けの笑顔。850グラム、自己記録のマダイを手に、「だって仕事じゃないもん、遊びだもん。ただうれしただけで済むじゃん」と、釣りの本質を言っていた。払い出していく潮で底取りが難しかったた



▲イチロウがマダイを取り込むと歓声上がる



▲850グラムのマダイを釣り上げて有終の美を飾る原田さん

め、チャンピオン原田も80グラムのジグを使っていた。そして見よう見まねで、ヨッシーのように着底から10回ほどシャクリ、そこからはマダイ狙いでタダ巻きをしていた。それが結果的にドンピシャの誘いとなり、ズガガツとマダイが食ってきたのだった。根魚をそれなりに釣ったイチロウとトモキ、そしてタカハシゴー。青物をサメにやられて悔しくてたまらないヨッシー。そしてマダイを釣り上げて大満足のチャンピオン原田。船上ではケラケラと笑いながらそれぞれに胸いっぱいになったこの日は確かに、終わりがきてほしくない小学生の夏休みそのものだった。

ヨッシーがオジサン(オキナヒメジ)を釣り、トモキがナイスイズワニゴチを釣り、実にバラエティ豊かである。金属のジグを使ってこんなに色んな魚が釣れるなんて……と、素朴な驚きがある。あまりにバタバタと魚が釣れるものだから、20代後半〜50代前半の小学生男子たちは、すっかり楽しくなってしまっている。「お、AKH釣れた」「アカハタね」「お次はUKR KSGだ」「えーと、ウツカリカサゴか」「ESOだあ」「エソね。そのままじゃん」この中にバイクレースの世界チャンピオンが交じっているかと思うと、なかなか痛快だ。

「ひえ〜」大人の小学生男子たちは、猛烈な引きを目の当たりにして楽しくて仕方がない。「たぶん青物だと思っけど……なんだろうな。ああつ、今ハリがひとつ外れた気がする!」プンツとなった。やばいよやばいよ。「出川かよ」「AMN、TRYだな」「なにそれ?」「アオモノ、ツレヨ」「分かんねえよ」長いヤリトリの間にくだらな話を繰り広げて緊張を緩和するものの、魚はちっとも上がってこない。ある一定の深さになると、巻き上げを嫌がって走り出すのだ。パワーもトルクもある。ワラサか、カンパチか、ヒラマサか……。18分経過したとき、「ああーッ」とヨッシーが叫

「ひえ〜」大人の小学生男子たちは、猛烈な引きを目の当たりにして楽しくて仕方がない。「たぶん青物だと思っけど……なんだろうな。ああつ、今ハリがひとつ外れた気がする!」プンツとなった。やばいよやばいよ。「出川かよ」「AMN、TRYだな」「なにそれ?」「アオモノ、ツレヨ」「分かんねえよ」長いヤリトリの間にくだらな話を繰り広げて緊張を緩和するものの、魚はちっとも上がってこない。ある一定の深さになると、巻き上げを嫌がって走り出すのだ。パワーもトルクもある。ワラサか、カンパチか、ヒラマサか……。18分経過したとき、「ああーッ」とヨッシーが叫



▲良型のアオハタを上げたイチロウ